

# 『いころ』の「先生」は、なぜ青年の卒業祝いの「晚餐」を設けたのか

—奥さんの〈生〉への独立性と強かさ、そして先生の安堵感—  
敬愛学園高等学校 石川 光男

※敬愛学園高校は、千葉県千葉市の私立高校。

## 1 はじめに

『いころ』の「上」に描かれている青年の卒業祝いの晚餐を、私達は気にも留めず読み過ぎてしまう。管見では識者もここを詳述していない。しかし、そこに『いころ』全体に決定的に関わる漱石の意図が隠されていたのである。このことを論述したい。ご笑覧下さり授業に就いて頂けたなら、幸甚に存じます。

## 2 「適当の時機」・「前からの約束」・「急に」

『いころ』の「上三十一」には、青年が先生に詰め寄る場面が描かれている。青年は「先生の過去」（新潮文庫・以下同様）を「評いて」でも先生から「真面目に」「教訓を受けたい」と迫った。そして、先生は「死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思ってる。あなたはそなた一人になれますか。なつてくれますか」と念を押し、青年の真面目さ・真摯さを確認しようとした。これに対して青年は震える声で、「もし私の命が真面目なものなら、私の今いった事も真面目です」と返答

する。先生はこれを聞いて、「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」と決断する。しかし、先生は条件を付ける。

「適当の時機が来なくっちゃ話さない」と。この「適当の時機」とは何時なのか。また抑も「適当の時機」という条件をなぜ付けたのか。疑問を残したまま「三十一」は終了する。

次の「三十二」から「三十五」までは青年の卒業祝いの晚餐の記述である。青年が大学を「卒業したらその日の晚餐」は「先生の食卓で済みます」というのが「前からの約束」であった。

先生は「御目どう」と言って卒業の祝杯を挙げた。しかし、青年は先生その言葉に「目出たいという真情も汲み取る事が出来なかった」。この晚餐が「前からの約束」にも拘らず、先生のこの言葉は青年に違和感を与えることになった。先生の腹に何か一物がある様に受け止めたのである。

「飯になった時、奥さんは傍に坐っている下女を次へ立たせて、自分で給仕の役をつとめた」。それらが済み、奥さんは「宅で」「拵えた」「ア

イスクリームと水菓子」を振る舞った。青年の卒業後のこと、財産のことなどが話題になった。

時間も過ぎ、「場」の雰囲気は明らかに開きの方向に向かっていった。事実、先生は「烟草を吹か」し出した。そして、青年は「二三日うち」に帰国する筈」だったので、「座を立つ前に」「一寸暇乞の言葉を述べた。『又当分御目にかかれませんか』と。奥さんも『九月には出ていらつしやるんでしようね』と念を押し、『私達もこの夏はことによると何処かへ行くかも知れないよ。【中略】行ったら又絵端書でも送って上げましょう』と言った。「場」は確實にお開きになるうとしていた。しかし、青年が玄関に向かう為、「席を立とうとした時に、先生は急に私をつらまえて、『時に御父さんの病気はどうなんです』と切り出した」。

青年が卒業した今、帰郷すれば以後会えなくなる可能性が大きいので、この機会を逃したなら「御父さん」の病状について訊けなくなってしまう—先生はそう考え、青年にその様に訊いたのである。しかし、先生が「前から」「約

束」したこの晚餐で、最も訊きたかった相手は青年ではなく―奥さん（妻）である。

青年は父親の病状も、その時間聞いた「尿毒症」という言葉も意味」も解らなかつた。奥さんは若干の知識を持ち合わせていた。母親が青年の父と同じ腎臓病を患って亡くなっていたからだ（上二十一）。「奥さんは昔同じ病気で死んだという自分の御母さんの事でも憶い出したのか、沈んだ調子」になり「下を向い」てしまった。

この「下を向い」た奥さんの様子を先生は見逃さなかつた。それは嘗て、上野公園で心を開いて相談に来たKを叩きのめす為に観察した「眼」であつた。この時も先生は結果的にKとは違つた視点で、「私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して」（下四十一）「下を向い」た奥さんを観察したのであつた。そして、先生は「突然奥さんの方を向い」て、祝いの席には相応しくない自分の死の話を始めた。「静、御前はおれより先へ死ぬだらうかね」と。

先生はお開きになろうとする「場」の雰囲気を見逃して、今までとは違う話の流れを作り始めた。しかし、奥さんの返答はまだ世間話の延長線上にあり、「笑い出し」てしまった。切迫した緊張感はなかつた。奥さんは、先生が「殆ど煩つた例がない」ほど「丈夫」だから、先生の方が長生きすると言ひ切つた。しかし、先生が「然しもしおれの方が先へ行くとするね。

そうしたら御前どうする」と付け加えた時、奥さんは「どうするつて……」と口籠つてしまった。一瞬、張り詰めた空気が流れた。仮定の話ではあるが、現実味を帯びていたからだ。それを打ち消すかの様に奥さんは、意識を切り替え青年を見て、「どうするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定つていう位だから」と、「笑談らしく」その場を取り繕つた。ことの奇異に氣付いた青年は、「立て掛けた腰を又卸して、話の区切の付くまで二人の相手」にならざるを得なかつた。この間、奥さんは、「こればかりは本

当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極つた年数をもらつて来るんだから仕方がないわ」と「仕方がないわ」を再度繰り返して、先生の話世間話に切り替えようとした。しかし、先生は話を引き戻し、「静、おれが死んだらこの家を御前に遣らう」、「おれの持つてるものは皆な御前に遣るよ」と具体的に語つた。現実感が更に強くなつた。しかも先生の「死は必ず奥さんの前に起るものと仮定されていた」。先生は「容易に自分の死という遠い問題を離れなかつた」。奥さんは「わざとたわいのない受け答え」をしていたが思い余り、「おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍仰しやるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」と強い口調で打ち

消した。それを聞いた先生は「庭の方を向いて笑」い、「それぎり奥さんの厭がる事を云わなくなつた」。

### 3 深い悲しみと生きることの強かさ、そして安堵感

先生が「庭の方を向」く描写の中で特異な箇所が他にある。先生が心に聞えていたものを言ひ放つた「上十四」の場面である。先生宅で青年と先生が談話中に信用問題が俎上に登つた時である。先生は「信用しないつて、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」「私は私自身さえ信用していいのです。つまり自分で自分が信用出来ないから、人も信用できないようになってるのです。自分を呪うより外に仕方がないので」と「庭の方を向い」て青年に言ひ放つたのである―抱え込んだ孤独が深く、重いものであることを庭の方を向いて吐き出したのである。この祝いの晚餐の時もそうであつた。先生の胸中に聞えていたものは何か。

先生を心配した奥さん―先生にとつてその奥さんとの出逢いは忘れられるものでは無かつた。学生の時、御嬢さんを見る先生の眼は「肉の臭」（下十四）が全くない、「宗教だけに用いる」「信仰に近い愛」（同）であつたこと、叔父に裏切られ、郷里へは二度と帰らないと先生が打ち明けた時、涙を流してくれたのは御嬢さん

であったこと（下 十五）、日本橋へ三人で行き買って上げた反物を帰宅後、御嬢さんはそと「膝の上へ置いて眺めて」（下 十八）いたこと、更にその反物を自分と「同じ戸棚の隅に重ねて」くれたこと―この様な甘美な想いが先生にはあった。

しかし、この様な想い出ばかりではなかった。結婚後、御嬢さんのお母さんが亡くなった時、奥さん（＝御嬢さん）が「これから世の中で頼りにするものは私より外になくなった」（下 十五／同様 下 五十四）と言った述懐を先生は、「腸に沁み込むように記憶」（同）したのであった。更に奥さんはある時、先生に「男の心と女の心とはどうしてもびたりと一つになれないものだろうか」（下 五十四）と訊ね、先生が曖昧な返事を返すと奥さんは「やがて微かな溜息を洩らし」（同）た。この「洩らし」た「微かな溜息」がどれほど深く、重いかを先生は骨身に沁みて理解した筈である。そうであるからこそ、「私は妻のために、命を引きずって世の中を歩いていたようなものです」（下 五十五）と告白し、「今日に至るまで既に二三度運命の導いて行く最も柔な方向へ進もうとした事」（同）、「馳足で絶壁の端まで来て、急に底の見えない谷を覗き込」（下 一）む様なことがあったが、「私は何時でも妻に心を惹かされ」（下 五十五）、「止して可かった」（同）と述懐しているのであった。

先生の脳裏に、恐らくこの様な奥さんとの想い出が走馬燈の様に想い出されたのではないか。そうであるからこそ、先生は祝いの晩餐という雰囲気にとぐわなくなっても、自分の死を妻がどう受け止め、どの様に考えているのか、つまり、自分が居なくなっても妻は少なくとも生きていけるのか、否かということを確認したかったのであった。そして、先生はこの時の奥さんの言葉、「序に地面も下さいよ」「けれども横文字の本なんか貰っても仕様がないわね」「売ればいくら位になって」、更に「おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」（上 三十五）という投げ遣りな言葉の裏にある、深い悲しみと生きることの強かさ、強靱さを知った時に期するものがあつた。「妻は自身の〈生〉と私の〈生〉とを切り離し、私を頼りにしない〈生〉を培ってきた―少なくとも先生はこのことを確認出来たのであつた。そのことは、死を執行するにせよ、「倫理的に生れ」「倫理的に育てられ」（下 二）、倫理的に生きてきた先生にとつて、是非確認しておかなければならないことであつた。後に「私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります。」（下 五十五）とまで、青年への「手紙」に書く契機を先生はこの時、奥さんの言葉から見いだしたのであつた。「庭の方を向いて笑つた」悲しいまでの先

生の胸中に去来したものは、奥さんの〈生〉への独立性と強靱さ、強かさであり、そして自身の複雑な安堵感であつた。

この奥さんの〈生〉への独立性と強靱さ・強かさ、そして安堵感を、先生は後にもう一度確認する時が来る。それは、明治天皇が崩御した時である（下 五十五・五十六）。明治天皇の崩御は「明治の精神」の終焉を意味し、「その後」に生き残っているのは必竟、時勢遅れだ」ということを、先生は「明白さまに妻にそう云つたのである。それを聞いた「妻は笑つて取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戲」つたのである。奥さんはこの時、自身の〈生〉と先生の〈生〉とを切り離し、生きることの独立性と強靱さ・強かさを既に獲得していたからこそ、先生をその様に「調戲」うことが出来たのである。返答を聞いた先生は複雑な安堵感を感じずにはいられなかつた筈である。

「前から約束した」この晩餐で、自分が居なくなつても妻は「不憫」（下 五十五）にはならない、自分が亡くなつても妻は生きていけるといふ〈生〉への意欲を確認したこの時こそ、「上 三十一」で青年に語つた「適当の時機」であつた。このことを確認した後、先生に最後に残された「義務」（下 二）は―否、「義務は別として私の過去を書きたい」（同）、自分の「過去を残らず、話して上げましょう」（上 三十

一) という青年との約束を果たすことであった。つまり、奥さんの〈生〉への意欲を確認することが出来た「適当の時機」の今、青年と「堅く約束した」(中十七)、「私の過去」を告白することが残された責務であった。それ故、青年は大学を「卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要」(上三十四)はないのであるが、先生は青年との約束を果たす為に晩餐後、玄関で青年を見送る際、「また九月に」(上三十五)と最後に伝えたのである。

その先生が青年と「堅く約束した」内実は「先生は「Kの歩いた路を、Kと同じように辿っている」(下五十三)ことに思い至った時、言葉に出来ないKの悲しみがどれほど深いものであったかを、取り返しの付かない痛恨の極みの中で受け止めたのであった。その痛恨を深く自覚し、「運命の冷罵」(下五十二)に呻吟し、それでも生きなければならない自分を問い質し、自責し続けた筈である。そして先生は自分の屍を堤防にして後に来る青年が「躓き」に留意し、間違いのない人生を確実に歩むことを、言葉尽くして知らせようとしたのである。

玄関で「挨拶をして格子の外へ」(上三十五)出た青年は、「再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時」、「玄関の電燈がふつと消えた」(同)という。この「ふつと消えた」ことは、今生の別れを意味している。事実、晩餐以後、青年は先生と会っていない。先

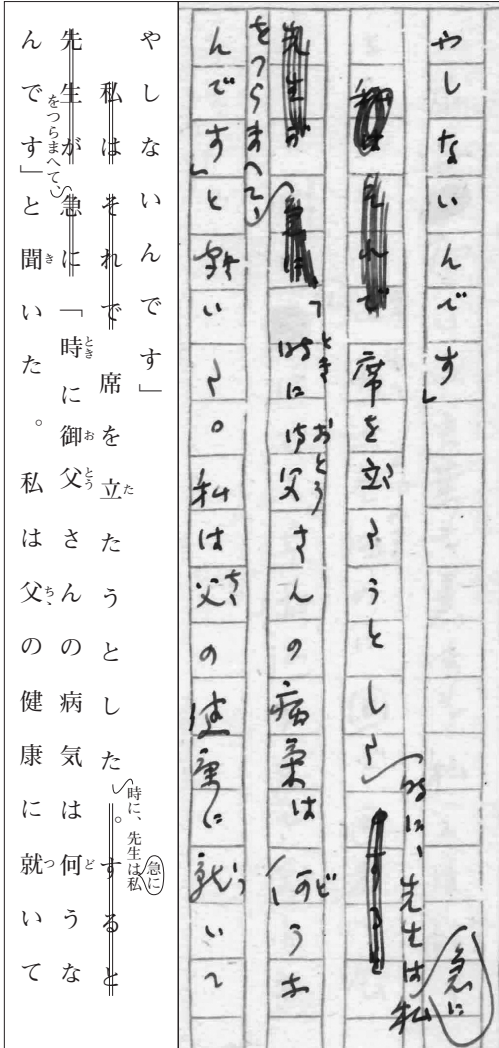
生と連絡が取れるのは、先生からの「一通の電報」が来た「中十二」である。更に、「中五」の次の文からも最期の別れであることが判る。

「私はその黒いなりに動かなければ仕末の付かなくなつた都会の、不安でざわざわしているなかに一点の燈火の如くに先生の家を見た。【中略】しばらくすれば、その灯もまたふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えているのだとは固より気が付かなかつた」

#### 4 おわりに

『ころ』には謎が多い。奥さんの「どう思ふか」(下十八)とは、何をどう思うというのか。また奥さんの「鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたり」(下四十四)する動作の意味するものは何なのかなどである。今回、謎の一つを解説したつもりである。驚いたことは『ころ』が新聞連載であったことだ。この「上」の「適当の時機」執筆時、既に「下」の結末を見据えていた漱石に、驚嘆せずにはいられない。

(注)「漱石自筆原稿「心」(岩波書店・一九九三年)より、「上三十四」の一部。B5判「漱石山房」原稿一回分八枚掲載の三枚目。



※右の自筆原稿の三行目の消された「急」は、当初「聞いた」に掛かっていた。しかし、訂正後は二行目に吹き出しの様に最後に加筆され、青年の行動を制する「つらまへて」に掛かっている。